ヨーロッパのエスペラント事情散見-東欧を中心として-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2011-01-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 水野, 義明 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/8858

ヨーロッパのエスペラント事情散見

——東欧を中心として——

水　野　義　明

I. は じ め に

私は明治大学在外研究員として，1984年から1985年にかけて11か月余り，ヨーロッパ各国を巡歴した。私の所属は法学部，担当教科は主として一般教養課程の学生を対象とする英語である。しかし，一方では，ヨーロッパの諸言語にも興味があり，特に国際共通語として創案されたエスペラントに関心をもち，普及運動にも多少関与してきた。この「教養論集」にも，エスペラントについていくつかの小論を発表している。

以上のような次第で，私の研究課題は，結局「ヨーロッパの言語事情と国際語エスペラントの可能性」ということになった。具体的には，できるだけ多くのヨーロッパ諸国を訪問し，その民族語使用の状況を視察すると同時に，訪問先のエスペラント・グループやエスペランチスト達に接して，国際語運動の実情をこの目で確かめようということである。

当然のことながら，「研究」の実質は長期間にわたる一所不住の旅行という形を取らざるを得ない。正味 343 日間の旅行期間中に，ミニ国家をも含めて28か国，約 120 の都市を訪れた。交通機関は一部を除いてすべて鉄道によった。旅程の概要は次の通りである。

1984年4月　中国（北京），ソ連（バルト三国を含む）

5月　ルーマニア，ブルガリア

6月　ハンガリー，チェコスロバキア

7月　ポーランド，オランダ，ルクセンブルク，ベルギー

8月　イギリス

9月　ノルウェー，スエーデン，フィンランド，デンマーク

10月　西ドイツ，オーストリア

11月　リヒテンシュタイン，スイス，フランス，モナコ

12月　イタリア，ユーゴスラビア，サン・マリーノ，バチカン

1985年1月　ギリシア，スペイン

2月　スペイン，ポルトガル

3月　ポルトガル，パリ経由　帰国

これらの国々は，初めて訪れるところが多く，いろいろと見聞をひろめることができた。いたるところで日本人の商社マンや旅行者に遭遇し，休暇を利用してヨーロッパ周遊をしている学生達の姿も多く見かけた。日本人の「海外進出」が予想以上であることを知って驚いた。とかく批判される日本人の「閉鎖性」や「島国根性」も，この勢いでは早晩消え去るのではないかという気がした。

しかし，多くの同国人の共通の弱点は，やはりコトバの問題のようだった。旅行中に出会った人々は，ごく少数の例外を除いてみな英語を利用していたが，概して片言程度で立ち入った場面では難渋していた。ヨーロッパといっても，イギリス以外は一般の人達は英語を話さず，現地語ができない限り彼等と直接交流するのは無理である。英語の「通用」するのはホテルやレストランや高級商店くらいで，それさえもソ連や東欧ではままにならない。街頭や列車の中で異邦人同志は，身振り手振りでやっと意思を通じあうだけで，この点では事情は日本とあまり変わらなかった。英語は思っていたよりも役に立たないという印象だった。

ところで，私の場合は事情がやや異なっていた。挨拶や飲食，買い物，ホテルの予約や交通機関の利用のときなどは，現地の言葉を使おうと努力したが，必要に応じては英語を使う場合も多かった。しかし，大部分は上述のエスペラントが非常に役に立った。というのも当然で，あらかじめ連絡をつけておいたエスペランチスト達をもっぱら訪問したからである。世界的にも，またヨーロッパの中でも，エスペランチストの数は全人口に比べると微々たるものだが，しかしその人達と一緒にいる限り，もはや全くの別世界で，日常の会話も，こみいった議論も，すべてエスペラントで用が足りるのだ。出迎えや見送りはもとより，宿泊，観光，食事，視察見学，記者会見，講演などあらゆる面にわたって，エスペランチストの世話になった。損得抜きの友情による奉仕なのだ。

これには，特別の事情もある。というのは，エスペラントは単に言語であるばかりでなく，それを使う人々の間に一種の同志的共感が存在するのだ。それは，言い換えれば，大国言語に頼らず中立的な国際語を媒介として諸民族の友好と対等な交流を実現しようとする理想意識と，そのための唯一の現実的手段であるエスペラントを普及しようという志向にほかならない。エスペランチスト達は通例互いに「サミデアーノ」(samideano「理想を同じくする者」) と呼び合っている。サミデアーノが寄り集まるところに「エスペラントゥーヨ」(Esperantujo「エスペラント国」) が出現する。私は，エスペラントのおかげで，英語だけしか利用しない旅行者よりも，ずっと多くの情報に接し，庶民の生活の実情を知ることができたと思っている。

Ⅱ. ヨーロッパのエスペラント　概要

11か月のヨーロッパ旅行を通して最も目立ったことは，やはり「東」と「西」との違いだった。一言で言うと，前者は「管理社会」，後者は「自由社会」ということになる。

これは，一般的国情や民衆生活についてのみならず，エスペラント運動にもあてはまることだと思う。世界エスペラント協会副会長で，日本エスペラント学会副会長の梅田善美氏は，近年盛んになってきた中国のエスペラント運動に

ついて，要するに「体制内運動」であると規定したが，同様のことが「東」についても言えると思う。民間の自主的な活動を主体とする「西」のそれとは，対照的である。

まず，ソ連，東欧圏においては，エスペラント運動にはほとんどすべての国に全国統一組織が存在し，これは一般に文化・国際交流関係を担当する官庁の管轄下にある。したがって，そこで働いている専従のスタッフは、国家・政府からの給料を貰っている，いわば「公務員」だ。

ソ連や東欧諸国の首都には，全国のエスペラント運動の中心である「エスペラント協会」の本部事務所が置かれ，時には専属の出版所も併設されている。「協会」の主催する行事の多くは，全国的行事とタイ・アップして開催される。国内的，国際的な催しには多かれ少なかれ公的援助がある。学校教育に正課のひとつとして導入されている国が多い。公的機関による市民文化講座のようなものの中にもエスペラントが取り入れられている。高等教育では、大学にエスペラントの講座が設置され，学位の取得が可能な国もある。

とりわけ注目すべきは出版活動で，各種のエスペラント学習書や辞書類は言うまでもなく，民族文学の古今の名作の翻訳や書下ろし作品が継続刊行されている。公的刊行物の形をとっているから，費用は政府機関によっていて，発行部数も数千と，エスペラント出版物の割には非常に多い。組織の機関誌や一般向けの普及雑誌など，定期刊行物も多数にある。

地方組織の充実も特色で，国によっては相当へんぴな地域にも，それぞれに中小のエスペラント・グループがあり，定期的集会を始め各種の普及活動，親睦行事等が活発に行われている。外国からエスペランチストが訪問した際など，個人的のみならず，所によっては組織を挙げて応対するというように，その受入体制はほぼ万全のように見受けられた。

私の見聞から得た印象では，エスペラント運動の盛況という観点から国別に列挙すると，ブルガリア，ハンガリー，ポーランド，ユーゴスラビア，チェコ

スロバキア，ルーマニアの順となる。ソ連は大国であるが，その割には運動はあまり盛んでないようだ。ただし，非スラブ系のバルト三国ではエスペラント運動は隆盛しているという印象だった。(ソ連では，スターリン時代にエスペラントの弾圧があり，多くのエスペランチストが「抹殺」されて，運動が一時中絶したという歴史がある。)

要するに，「東」のエスペラント運動は，公的援助もあって，「西」や日本よりもはるかに有利な条件下に進展していると言えるだろう。(ただし，その反面，体制内運動のひとつとして，さまざまな制約があることも想像できる。たとえば，政府の政策や時の指導者の小伝，演説などのエスペラント訳文書はたくさん見かけたが，それから逸脱するような種類のものは勝手に出すことはできないのではないか。)

しかし，「東」の盛況の理由は，公的援助ばかりではないと思われる。それと言うのも，まず伝統的に，東欧はエスペラント発祥の地であり，その初期には当時の帝政ロシアが運動の中心をなしていた。次に，言語的には「東」の国々の言語は，ロシア語を除いてすべて「少数民族語」であり，国際交流の舞台に直接登場する機会がなく，ロシア，ドイツ，トルコなどの支配民族の言語以外の「国際的交流手段」への志向が大きかったこともある。さらに，政治的には，現在の東欧諸国は，戦後ソ連によって「社会主義圏」に組み入れられ，陰に陽に厳しい監視を受けているので，「反ソ」感情が強く，その反動としてエスペラントへの関心が高いとも考えられる。

これに対して「西」では，活動の内容は「東」とあまり変わりがないが，公的援助はなく，すべてエスペランチスト達のイニシアチブと財政的負担によっている。組織的には，全国統一組織というよりも，地域・職域組織の連合体である「連盟」という形が多い。(ちなみに，日本では，エスペラントの全国的統一組織は未だ存在しない。) 少数の例外を除けば，組織の運営，実務の遂行は大部分手弁当の活動家の働きに依存している。学校へのエスペラント導入

も，公的な方針として採用している国もあるが，理解のある校長などの個人的配慮に頼っている場合も多い。

出版活動は，エスペラント人口を考えると，かなり盛んで，すでに多数の古典や現代文学の翻訳のほか，エスペラント書き下ろしの作品も刊行されていて，科学技術分野でも用語辞典や専門論文など若干見受けられる。

国際的交流，特に外国人エスペランチストへの応対については，個人的なものは別として，組織的には「東」ほど積極的ではなかった。各人が自分のできる範囲で，一生懸命応対してくれているという印象だった。しかし，現地に個人的知り合いのない場合でも，エスペランチストの旅行者のために宿泊その他の世話をしてくれる国際的ネットワークがある。「パスポルタ・セルボ」といって，「世界エスペラント青年組織」のサービス事業のひとつである。毎年発行される名簿には，実費または無料で自宅を宿泊用に提供する人々が登録されていて，誰でも簡単に利用できるようになっている。

このほか，エスペラント図書館や博物館，国際エスペラント学校や「エスペラント文化センター」などもあって，それぞれ独自に活発な活動を行っているようだった。

東西を通じて，やはりヨーロッパは今もなおエスペラントの本場という感をあらたにしたが，中でも「西」の状況は，体制外的市民運動という意味で，「東」とは別の意味で注目に値すると思う。エスペラント運動の初期においては，「ロシア時代」のあとにフラランス中心の時代がしばらく続いた。エスペラントの語彙は，フランス，イタリー，スペインなどラテン系諸言語由来のものが圧倒的に多く，英語，ドイツ語などゲルマン系言語由来のものがこれに次ぎ，スラブ系由来の単語はむしろごく少数である。母語との関係から言っても，エスペラントは西欧の人々にとって非常に親しみ易いことは否定できない。現在，世界のエスペラント運動の中心である「世界エスペラント協会」は，オランダのロッテルダムに置かれているが，これはヨーロッパのみならず，アジア，アフリカ，アメリカ，オセアニアなど全世界のエスペランチスト

やエスペラント組織を結集する総本山となっている。

西欧のエスペラント運動は，その時々の政府や権力の意向に関係なく，特定のイデオロギーに偏することもなく，自由な立場から真の世界平和と諸民族の相互理解と友好のために，着実に進展していると言えるであろう。

以上が，ヨーロッパのエスペラントについて私が得た概略の印象である。人口の総体から見れば，ヨーロッパといえどもエスペランチストの数は微々たるものであるが，少なくとも日本のそれと比べると，量質ともにはるかに進んでいると思う。

西欧については，日本との間にエスペランチストの往来が盛んであり，事情もよく知られている。しかし，東欧については，交流が比較的少なく，情報量もそれほど多くはない。それで，本稿では，東欧を中心として記述することにした。本論に入る前に，世界各地域との比較において把握するため，参考資料を挿入した。

Ⅲ．ヨーロッパのエスペラント運動 その他の地域との比較（資料）

ヨーロッパのエスペラント運動の隆盛は，世界のその他の地域と比較してみれば明瞭である。たとえば人口に対するエスペランチストの比率などが，その基準として考えられるであろう。ただし，エスペランチストの数については，さまざまな説があって，一定しない。ひとつの目安として，ここでは，世界エスペラント協会（以下では「協会」と略称）の会員数をとりあげる。これは、同協会から毎年発行される「年鑑」に明記されているところである。

「協会」の会員には，団体会員と個人会員がある。前者は，「協会」に加盟する各国のエスペラント団体に所属する会員のことで，後者はそれとは別個に個人の資格で「協会」に加入している会員である。両者の間には重複もあり，また各地域の団体所属の会員数は正確に掌握するのが困難なので，ここでは，個人会員数のみ取り上げた。

このほか，「協会」には「代表委員」(delegito) がある。これは，各国に存在する職業別，都市別の代表者のことで，その職域や地域のエスペランチスト達と「協会」とを仲介し，種々の国際的奉仕に従事している。(ついでながら，私の今回の旅行は，この「代表委員」のネットワークにもっぱら依存した。)これも，「年鑑」にその数が記載されていて，各地のエスペラント運動の実態の一端を表している。

ただし，これらの数字が，各地域のエスペラント運動の消長をそのまま反映していると考えるのは早計であり，国によって異なる事情があることを考慮しなければならない。

「協会」の会員には，一定の会費を納入する義務があるが，たとえば外貨管理のきびしいソ連・東欧圏や，経済事情の悪い，いわゆる第三世界からの加入者数が，実勢よりも少なくなっているのは当然である。また，「代表委員」についても，国際的交流に関する各国の政策によって，大いに影響があると思われる。

したがって，以下の比較表を検討する際にも，このような事情を勘案しなければならないが，ともかく，概略の状況を知る手がかりとして，敢えて作成した次第である。地域別でも，国別でも，ヨーロッパが断然群を抜いていることがわかるであろう。

世界エスペラント協会個人会員及び代表委員数とその人口比

(1985年11月21日作製)

(注) 1. 個人会員及び代表委員数は，世界エスペラント協会（ＵＥＡ）発行の「年鑑」(1985年度版）による。

2. 人口は，「朝日各国情報　ザ・ワールド'86」(朝日新聞社　1985年9月）による。

3. 人口の単位は万，端数は四捨五入した。

4. パーセンテージは，世界総人口及び「年鑑」の個人会員総数，代表委員総数に対するものである。

1. 西ヨーロッパ　(個人会員数と代表委員数との比　1.8)

国名	人口	個人会員	同一人当りの人口	代表委員	同一人当りの人口
フランス	5,465	211	26	377	14
西ドイツ	6,142	191	32	354	17
イタリア	5,684	120	47	202	28
オランダ	1,436	119	12	168	9
スウエーデン	833	118	7	149	6
イギリス	5,634	117	48	223	25
ベルギー	986	80	12	124	8
フィンランド	486	65	7	93	5
スペイン	3,823	60	64	74	52
スイス	648	42	15	70	9
ノルウェー	413	38	11	61	7
デンマーク	511	38	13	58	9
オーストリア	755	17	44	28	27
ポルトガル	995	10	100	12	77
アイスランド	24	10	2	10	2
ギリシア	985	8	123	16	62
ルクセンブルク	37	5	7	8	5
アイルランド	351	5	70	6	59
マルタ	38	2	19	2	19
サン・マリーノ	2	1	2	2	1
合計と人口比	35,248	1,157	30	2,038	17

2. ソ連・東ヨーロッパ　(個人会員数と代表委員数との比 1.7)

ユーゴスラビア	2,280	81	28	116	20
ハンガリー	1,069	76	14	115	9
チェコスロバキア	1,542	59	26	110	14
ソ連	27,250	47	580	101	270
ブルガリア	894	46	19	70	13
ポーランド	3,657	41	89	72	51
東ドイツ	1,670	9	186	14	119
ルーマニア	2,255	8	282	20	113
合計と人口比	40,617	367	110	618	66

3. 北アメリカ　(個人会員数と代表委員数との比 1.9)

米国	23,450	121	194	241	97
カナダ	2,491	27	92	46	56
メキシコ	7,510	14	536	22	341
キューバ	988	14	71	18	55
コスタリカ	238	1	238	4	60
グァテマラ	793	1	793	2	397
サルバドル	523	1	523	1	523
合計と人口比	35,993	179	201	334	108

4. 南アメリカ　(個人会員数と代表委員数との比 1.7)

ブラジル	12,966	132	98	204	64
アルゼンチン	2,963	32	93	63	47
ベネズエラ	1,639	15	109	29	57
チリ	1,168	9	130	26	45
コロンビア	2,752	8	344	13	212
ウルグァイ	297	4	74	6	50
ボリビア	608	1	608	4	152
合計と人口比	22,393	201	111	345	65

5. アジア　　(個人会員数と代表委員数との比　1.4)

日本	12,023	93	129	214	97
イスラエル	410	39	11	65	6
中華人民共和国	103,968	30	3,466	35	2,971
韓国	3,995	25	160	30	133
イラン	4,207	14	300	14	300
インド	73,226	5	14,645	8	9,153
スリランカ	1,542	4	386	8	193
トルコ	4,728	2	2,364	2	2‘364
モンゴル	180	1	180	6	30
インドネシア	15,943	1	15,943	3	5,314
ネパール	1,574	1	1,574	3	525
香港	531	1	531	2	266
シンガポール	250	1	250	2	125
イエーメン	216	1	216	1	216
レバノン	264	1	264	1	264
タイ	4,946	1	4,946	1	4,946
合計と人口比	228,003	220	1,036	305	746

6. アフリカ　　(個人会員数と代表委員数との比　1.6)

南アフリカ	3,080	9	342	19	162
ザイール	3,115	7	445	8	389
コンゴ	169	2	83	8	21
コートジボアール	930	2	465	2	465
チュニジア	689	2	345	2	345
カメルーン	916	1	916	2	458
マダガスカル	940	1	940	1	940
スーダン	2,036	1	2,036	1	2,036
スワジーランド	61	1	61	1	61
ナイジェリア	8,902	1	8,902	1	8,902
レユニオン	53	1	53	1	53
合計と人口比	20,887	28	746	46	454

7. オセアニア　　(個人会員数と代表委員数との比　1.6)

オーストラリア	1,537	43	36	64	24
ニュージーランド	320	38	8	69	5
合計と人口比	1,857	81	23	133	14

8. 各国の合計と人口比　　(個人会員数と代表委員数との比　1.6)

71　か　国	384,998	2,337	165	3,819	101

9. 地域別比較

地域名	総人口		個人会員		一人当り人口	代表委員		一人当り人口
ヨーロッパ	75,875	16%	1,524	69%	50	2,656	70%	66
西欧	35,258	8%	1,157	53%	30	2,038	54%	17
ソ連・東欧	40,865	9%	367	17%	110	618	16%	66
アメリカ	64,610	14%	380	17%	170	679	18%	95
北米	38,940	8%	179	8%	278	334	9%	117
南米	25,670	5%	201	9%	128	345	9%	74
アジア	273,692	58%	220	10%	1,244	305	8%	897
アフリカ	52,136	11%	28	1%	1,862	46	1%	1,133
オセアニア	2,371	0.5%	81	4%	29	133	4%	17

10. 世界総人口との比較

世界総人口	468,932	2,337	201	3,819	123

〔注1〕 ソ連を除く東欧地域について

東欧総計	13,615　3%	320　15%	43	517　14%	26

〔注2〕 米国について

米国	23,450　5%	121　5%	194	241　6%	97

〔注3〕 日本について

日本	12,023　3%	93　4%	129	124　3%	97

〔注4〕 中国については文化革命以後，開放体制に入ってから，政府の積極的支持を得て急速に発展，現在学習人口20万，高等教育では「第二外国語」のひとつとなっている。(日本エスペラント学会機関誌「エスペラント」，1985年11月号，梅田善美氏の報告による)

Ⅳ. 東欧のエスペラント

前節の「協会」会員数と人口との比較（特に〔注１〕）を見ても，世界のエスペラント運動における東欧の地位が高いことがわかる。さらに，同地域の厳しい外貨管理，西欧圏との交流に対する制約，相対的に低い所得水準などを考慮すると，東欧のエスペラントの実勢は，西欧に比べてまさるとも決して劣らないと言えるだろう。以下では，私の訪問した国々について，直接見聞したところに基づいて，報告したいと思う。

(1) **ルーマニア**　最初の訪問国ルーマニアでは，首都ブカレストに滞在中現地のエスペランチストと接触できなかった。後になって，ハンガリーにいたときに，ルーマニアのエスペラント・グループの青年部長ミハイ・ディンツ氏とたまたま同宿となり，同氏を通じて，ルーマニアのエスペラント運動の実情を知ることができた。

それによれば，「ルーマニアのエスペランチストは約3,000，全国統一組織はまだ成立していないが，それに准ずるものとして，西部の地方都市ティミショアラに本部を置く『国際語学習集団』(Kolektivo Esperanto-Interlingvistiko)がある。現在，国内エスペランチストの名簿を作成中，首都からは機関誌「ブカレスト通信」が刊行されている」とのことだ。

よく知られているように，ルーマニアは東欧社会主義圏の中ではソ連と異なる独自の道を歩んでいるが，その反面国内の「しめつけ」がきびしく，国際交流にも制約が課せられている。たとえば，エスペラントによる国際文通も検閲を受けているとのことだ。

そのためか，同国の事情はあまりよく知られていなくて，「協会」機関誌「エスペラント」に，「ルーマニアのエスペラント運動は停滞している」という記事が出たほどだ。

しかし，上述のディンツ氏は，最近の事例を引用して，これに反論していた。たとえば，1983年ブタペストで開催された第68回世界エスペラント大会

(5,000人参加) には，ルーマニアからも30人が参加したこと，会場では政府作製のエスペラント文ルーマニア観光案内を配布したこと，エスペランチストのチェス・クラブもあり，毎年夏国際トーナメントを行っていること，学校でも選択科目としてエスペラントが教えられ，約100人の学習者がいることなどを挙げていた。

私の印象では，ルーマニアのエスペラント運動はその他の東欧諸国に比べてやや不活発ということだが，これは，ひとつには，公的支持がないのにもよると思う。国家の対外・文化政策が転換すれば，同国のエスペラント運動は飛躍的に発展するように見えた。鎖国に等しい状態だが，国際交流を目指すエスペラント運動に対する「弾圧」はなく，着実に進展していると思われた。

ついでながら，ディンツ氏は義務教育を終えた程度の一介の労働者だが，事実上ルーマニアのエスペラント組織の中心人物のひとりであり，この点でも，運動の層の厚さを窺わせた。

(2) **ブルガリア** ルーマニアからブルガリアに入ると事情は一変した。ここでは，国を挙げてエスペラントに肩入れしているという印象だった。

首都に本部がある「ブルガリア・エスペランチスト協会」(Bulgara Esperantista Asocio) は，全国の地方組織を統括して，会員数7,000人，人口比は0.08%で，1万人に8人のエスペランチストがいる割合だ。(日本の20倍から30倍もいる勘定となる。) 世界エスペラント協会の会員数から見ても，ハンガリーと並んでヨーロッパ最大のエスペラント王国と言えるだろう。

ブルガリア・エスペランチスト協会の職員はすべて国家から給料を得ている公務員で，協会の運営にも政府の補助がある。機関誌「ブルガーラ・エスペランチスト」は，国内のみならず，海外にも購読者が多い。出版事業も盛んだ。国際的活動については，これまでに首都ソフィアや黒海沿岸のバルナに世界エスペラント大会を招致したことがある。学校教育にもエスペラントが導入されていて，全国的な学力検定試験や教師資格認定制度が完備している。

ブルガリア・エスペランチスト協会の事業のうち特に有名なのは，「国際エ

スペラント学校」(IEK Internacia Esperanto-Kursejo) だ。これは，同協会が国家の援助を得て建設，運営している国際規模のエスペラント教育機関で，上述のバルナと，ギリシア国境に近い山間のピサニッツァに設けられ，前者は夏期のみ，後者は年間を通じて各種の講習その他の企画を実行している。私はピサニッツァに1週間ほど滞在したが，シーズン・オフにもかかわらず，世界各国からエスペランチストが入れ代わり立ち代わりやって来て，200人以上も収容できる大きな建物は活況を呈していた。

私のブルガリア滞在中に，たまたま黒海沿岸の保養地スリャンチェフ・ブリャーグ（「太陽の浜辺」）で，国際エスペランチスト・鉄道員連盟（IEF Internacia Federacio de Esperantistoj-Fervojistoj) の第36回大会が開かれていた。1,000人くらいの参加者があり，この種の会合としては予想を越える盛会だった。しかし，もっと驚いたのは，ブルガリア政府の積極的支持である。

まず，同大会の前宣伝として，数日前に首都で合同記者会見があった。全国から17社，50人の記者が集まり，エスペラントに対するジャーナリズムの関心の高さを示した。また，大会参加の代議員には，大会の前後17日間通用する国鉄全線一等無料パスが支給され，私もその恩恵に浴した。さらに，大会当日の開会式には，ブルガリア共和国運輸大臣ヴァーシル・ツァーノフ氏が挨拶し，国際運輸業務におけるエスペラントの有用性を強調し，政府の変わりない支持を表明した。さらにその晩は，同大臣招待の晩餐会があり，何百人という出席者は，山のような珍味佳肴と美酒の饗宴を満喫したのだった。

国際語運動に対する，このような国家の力の入れようには，いろいろと理由もあることだろうが，ブルガリア・エスペランチスト協会書記のディミタル・パパーゾフ氏の説明によれば，「国家は支持に対する見返りとして，エスペランチストが国民の一般的文化水準の向上に貢献することを期待している」ということだった。

そう言えば，ソフィアにいたときに，一般市民対象の「エスペラント週間」

に出会った。5月24日は，ブルガリア語やロシア語特有のキリル文字の成立を記念する「スラブ文字と教育・文化の日」となっていて，メーデーをも凌ぐほどの一大祝祭日だ。エスペランチスト達も，この日に合わせて特別の企画を組み，講演，演劇，コンサートなどによって，エスペラントと国際語思想を国民の間に宣伝しようというわけだ。

最後になったが，本当は真先に述べなければならないのは，我が友ペトコ・ボーネフ氏の献身的な接待だ。同氏は，60年配，化学技師で，私とは3年余りの文通相手だが，私のために勤め先から20日間の休暇をとり，前述の国際エスペランチスト・鉄道員連盟の大会を含めて，ブルガリア国内を終始同行，案内してくれた。こういうことは，私が初めてではなく，これまでにも日本からのエスペランチストに付き添って1か月近くも案内したことが2度もあったという。損得抜きの同志的友情による奉仕には，全く頭の下がる思いがした。

ボーネフ氏に連れられて，ブルガリア各地を訪れたが，行く先々の小さな町にエスペランチストのグループが必ずあって，心から歓迎してくれた。東西500キロ，南北300キロの，このバルカンの小国の隅々まで，エスペラントが浸透しているという感じだった。

(3) **ハンガリー** ハンガリーは，1966年と1983年の2回，世界エスペラント大会が首都ブタペストで開催されたことで知られている。(後者の大会には，エスペラント史上第2位の4,834名の参加者があった。) ブルガリアと同じく，この国にも全国組織の「ハンガリー・エスペラント協会」(HEA Hungara Esperanto-Asocio) があり，会員数7,000，国内20の地方組織を統括している。ブタペストには，地区グループが23あって，所属600名，このほか会員100人を擁するエスペランチスト・鉄道員グループもあるということだ。

ここでも，エスペランチストは政府の文化政策と連携していて，私が到着した日には，たまたま一般市民対象の「エスペラントの夕」の催しがあった。正面に「エスペラントによって平和を」と大書した垂幕があり，広い会場を埋め

た大観衆が，ロック調のバレーを見たり，エスペラントの詩の朗読に聴き入っていた。

ブダペストでは，ハンガリー・エスペラント協会の組織部書記をしているオスカール・プリンツ氏の自宅に2週間泊めてもらった。同氏から，協会の運営などについて話を聴いた。それによれば，「同協会の運営は，ほぼ安定している。経費の1割には国家の補助があるが，大部分は会員の納付する会費と付帯事業からの収益で賄っている。年間の収入は140万フォリント（700万円）で，支出はこれをやや上まわり，雑誌部門は赤字である。本部専従職員は16，7名，すべて国家より給料を得ている。人件費は予算の10分の1程度。独自の印刷所と若干の売店を経営している」などなどということだ。

出版活動も活発だ。各種の辞書類や単行本のほかに，定期刊行物としては，海外にも読者が多い「ハンガリー生活」（“Hungara Vivo”）や「ブダペスト通信」，「若い友達」（以上エスペラント文）があり，またエスペラントのPRのため一般人を対象としてハンガリー文の月刊誌「世界と言葉」を出している。この発行部数が9,000部とのことだ。ハンガリーの12倍の人口をかかえる日本で，同趣旨の月刊誌「エスペラントの世界」が1,000部と少しのところで苦戦しているのに比べると，雲泥の相違だ。

学校教育へのエスペラント導入については，小・中学校で試験的に採用されているほか，ブダペスト大学（正式には，エオェトヴェシュ・ロラーンド大学）の言語学科にエスペラント講座が設置され，博士の学位取得も可能という。（日本人では，深谷志嗣（しとし）氏が，ここで学位を取った。）同講座の指導教官は，イシュトヴァン・セルダヘーイ博士だ。ちょうど令息が神戸大学に留学し，日本近代史を研究していることもあって，日本人の私を快く迎え，ハンガリーのエスペラント事情について親しく説明してくれた。帰り際には，労作の「エスペラント教授法大要」と「エスペラント文学大成」を贈呈された。

翌日訪ねたブダペスト工科大学では，オットー・ハスプラ博士にあった。博士の専門は水力学だが，熱心なエスペランチストでもあり，エスペラントの科学技術用語制定の仕事の推進者のひとりだ。特に第三世界での高等教育にエスペラントを利用する可能性と必要について力説していた。

このほか，ブダペストで一見に値するのは，「エスペラント図書館」であろう。これは，正式には「ファイシ・エスペラント・コレクション」といい，カーロイ・ファイシ氏の個人収集を一堂に収めたものだ。都心の大通りに面したアパートの二階100坪ほどのスペースに，内外のエスペラント関係書籍，雑誌，その他の文献資料が，大量に，しかも整然と陳列してあった。ファイシ氏は，私財のすべてを投げ打って，この収集を築いたとのことだが，独力でよくもこんなに集めたものだ。社会主義圏では最大の規模で，将来は国家に移管する計画もあると言っていた。

ブダペストでは，市内のエスペラント・クラブ「エグレッシー」の例会を覗いてみた。12，3人が出席していたが，婦人が大部分で，すべて中年以上の人達だった。「エスペラント人口の老齢化」を嘆いていた。会は所定のプログラムによって進められ，レクチャー担当者の婦人音楽教師の「リズムについて」という話の後，バイオリンの演奏や一同の雑談が続いた。ハンガリー語を話す者は誰もいなくて，もっぱらエスペラントを使っていた。(同国人のエスペランチスト達が自国語で話し合うことを，エスペラントでは「クロコディーリ」“krokodili”《「ワニのコトバを話す」》といって戒めている。)

著名なエスペランチストとしては，「現代エスペラント文学概観」の著者ヴィルモシュ・ベンチク氏にも会った。同氏は，大学で言語学やハンガリー文学を教えていて，日本にも1か月ほど滞在し，各地で講演したとのこと。40年配で，非常に早口のエスペラントを話す。主としてハンガリーの経済改革について話を聴いた。ソ連の監視下では一定の制約があるものの，これまでの農業部門での成功に続いて，工業部門でも改革が順調に進めば，ハンガリーは東欧随

一の豊かな国になるだろうとのことだった。

地方では，首都から100キロくらい東方の古都エゲルにあるエスペラント・クラブを訪問した。人口6万6千ほどの小都市だが，熱心なエスペランチストが2～300人もいて，初心者を合わせると会員数は800名に達するという。「人口1万人にエスペランチスト一人」という大ざっぱな基準から見ると，驚くほどの数字だ。会長はじめ有志の人達が心をこめて歓待してくれた。

25日に及ぶハンガリー滞在中，多くの人々の世話になったが，中でもマールクシュ・ガーボル氏の名を特筆しなければならない。同氏は30年配で，本職は石油探査企業のコンピューター技師ということだが，日本に留学の経験もあり，エスペラントも流暢だ。実は，このガーボル氏が，ハンガリーでの私の充実した日程のほとんどすべてを企画してくれたのだ。ブルガリアのボーネフ氏と同じく，ガーボル氏にはどんなに感謝しても十分ではない思いがする。私事ながら，最後に一言つけ加える次第である。

(4) **チェコスロバキア**　世界エスペラント協会の個人会員や代表委員の数からいうと，チェコスロバキアは，ブルガリア，ポーランドを凌いで東欧第3位となっている。この国の特色は，チェコ社会主義共和国とスロバキア社会主義共和国との連合体という点にある。民族，言語ともにスラブ系なのだが，細かいところではいろいろ相違があって，互いに独自性を保ちながら一国を形成しているのだ。チェコは，ボヘミア，モラビアの2地域を併せて，全人口の65%を占め，プラハを首都とする。一方，スロバキアは，スロバキア地方に拠り，全人口の29%を占め，ブラチスラーバが中心である。したがって，同国のエスペラント組織も，2分していて，それぞれ個別に世界エスペラント協会に加盟している。

チェコ・エスペラント協会の会員数は4,000（非会員も含めると，登録エスペランチストは6,400人）。チェコの人口は975万だから，会員の人口比は0.04

%で，人口１万人に４人のエスペランチストがいることになる。

これに対して，スロバキア・エスペラント協会は会員1,300名を擁し，435万の人口に対する比率は0.03%，人口１万人に３人の割合となる。ブルガリアに比べると半分以下だが，それにしてもかなり大きい数字だ。

チェコスロバキアの国際語運動の歴史は古い。S・カマリートの「チェコスロバキアのエスペラント運動史」（チェコ・エスペラント協会，プラハ，1983年）によると，ポーランドでザメンホフが1887年に初めてエスペラントの草案を発表してから早くも３年後には，チェコ語による本格的な学習書が出版されている。「運動史」巻末の図書目録には，チェコスロバキア人の手になるエスペラント関係文献が557点も挙げてある。関心の高さを物語るものだ。

私のチェコ滞在は１週間に過ぎず，プラハとその周辺を訪れただけなので，これまでのように，その国の一般人の生活をつぶさに見たり，チェコのエスペラント界の要人に会って事情を聴いたりする機会がなかった。それというのも，ひとつには，私が世話になったエスペランチストの友人が，ブルガリアのボーネフ氏やハンガリーのガーボル氏と違って，組織に所属しない，一介の労働者であったからだ。

我が友ヨセフ・ボルリーチェク氏は40才，私とは７年来の文通友達だ。プラハ近郊のシュチューティ村に住み，工場の製材用鋸の研摩係をしている。高等教育は受けず，専門的技術も身につけていないようだ。夫婦と子供二人の家族で，日本よりやや大きめだが２ＤＫのアパートに入っている。給料が安くて，物価が高いとこぼす。ビールが大好きなのだが，家計にひびくので一日一杯しかやれないという。話題も主として身辺のことで，天下の大勢を論ずるということはない。要するに，ごく普通の市民の一人だ。

しかし，彼には貴重な取柄がある。それは，エスペラントを知っているということだ。何かのきっかけがあって興味をもち，以後はほとんど独学でマスターしたというが，発音も文法も正確で，自由に話しができる。聞けば，国外に

も何人かの文通相手がいるとのことだ。彼にとって，エスペラント は唯一の「外国語」だ。しかも，それを十分に活用している。インテリの趣味としてではなく，一般人の国際交流の手段というエスペラント本来の趣旨を，ヨセフはみごとに体現しているのだ。遠来の客が来たので夫人の許可が出たのか，始終ビールを飲み続けている髭面のヨセフに，私は何か畏敬の念を抱くようになっていた。

チェコでは，このほか，やはり文通友達のイージー・セドルマイヤー氏に会った。こちらは，50年配，郵便局勤め。エスペラントはまことにたどたどしいが，気の良さそうな人柄だ。介添のイージー・ラウベ氏は地区の党の要職にあるとのことで，ヨセフは少々敬遠しているようだったが，エスペラントは非常に上手だ。聞けば，チェコ・エスペラント協会の役員をしていて，科学技術出版部門の責任者とのこと。エスペラントの専門用語を統一，制定する必要をしきりに強調していた。

プラハの南部，マーリ・ノーバ地区のエスペラント・グループを訪ねたこともあった。20人ほどの出席者はすべて中年以上の人達で，ここでも，やはり，エスペラント界の高齢化が見られた。求めに応じて，私が日本のことにつき簡単な「講演」をすると，質問が次々に出た。日本への関心は非常に高いようだ。そのあと，プラハ在住で，放送局勤務のイギリス人リチャード・ハワード氏が講演した。「エスペラントは簡単で容易だ」という俗説に対する反論で，説得力があった。

チェコでは，「研究」のための情報はあまり得られなかったが，その代わり「庶民」の生活を垣間見ることができた。ヨセフの自宅のほかに，弟のミラン宅にも2，3日世話になった。ミランは巡査上がりのバスの運転手で，エスペラントは全然知らない。未明に出勤するような厳しい勤務だが，ひどく陽気で，おしゃべりだ。美人のイバーナ夫人の手料理とともに，異常低温で肌寒い「プラハの夏」を楽しんだのだった。

(5) **ポーランド**　ポーランドは，言うまでもなく，エスペラント発祥の地であり，創始者ザメンホフの故国だ。いわばエスペラントの本場で，人口も東欧諸国の中ではずば抜けて多い。しかし，その割には，世界エスペラント協会の個人会員や代表委員が少ないのは，近年の不安定な政情や困難な経済事情の影響によるのだろうか。

ポーランド・エスペラント協会の書記ボグダン・ワウジンスキー氏によれば，「人口3,650万のこの国には，全国統一組織としてポーランド・エスペラント協会があり，会員数7,000，50の地域団体を統括している。本部専従職員は5名，国家から給料を得ている。協会に対する文化省の補助金は年間300万ズウォーティ（600万円強)。首都ワルシャワには，5,000人の会員を有するワルシャワ・エスペラント・クラブがあって，毎週水曜に例会を開いている」などなどだ。

例によって人口比を試算すると，0.02%となり，1万人にエスペランチスト2人ということになる。「エスペラントの国」にしてはやや少ないようだが，厳しい国情も考慮しなければならない。現に，私が滞在していた頃は，3年先に迫る「エスペラント100周年記念世界大会」を故地ワルシャワで開催するという計画も，その実現が危ぶまれていたほどだ。(その後，事情が好転し，大会は予定通りワルシャワで開かれることが決定した。)

学校教育へのエスペラント導入については，大学で選択語学となっているほか，小，中，高校でも教えられているところがあるという。エスペラントの教員になるためには，その他の語学と同様に，一定の資格試験があり，有資格者は現在200人くらいとのことだった。

ワルシャワでは，松本照男氏宅に世話になった。松本氏は，40年配，明治大学法学部の出身だ。在学中からエスペラントで頭角を現し，卒業後はポーランドに渡って，ヨーロッパの若手エスペランチスト達の間で活躍し，現在は日本文化放送特派員となっている。自主労組「連帯」の高揚期には，現地からの生々しいルポルタージュで，第一線ジャーナリストとして名声を博した。医科大

学の主任研究員のハリーナ夫人もエスペランチストで，まだ幼い二人の男の子は，日本語，ポーランド語のほかに，エスペラントもわかるという。文字通りの「エスペラント一家」だ。松本氏の配慮のおかげで，ワルシャワの日々は，まことに充実したものとなった。

なかでも良い経験となったのは，ポーランド放送のインタビューだ。都心のビル内の本格的な録音室に案内されて，緊張した。「ラジオ・ポローニア」からは，英語その他の言語とともに，エスペラントによる定時番組が放送されている。今日は遠来の客を迎えてのインタビューということだ。

主任の女史の質問に答えて，旅行の目的，ポーランドの印象，平和運動への考えなどしゃべったが，たどたどしいエスペラントで，自分としてはあまり良いできとは思わなかった。すると，飛入りに英語部門からもインタビューの申し出があった。こちらは，「英語教師がエスペラント旅行をしている」ということで，その理由を「追及」された。「ナショナリズムの興隆と並行して，各民族の固有言語が台頭し，世界の言語的混乱が増幅する一方，国際交流の場で依然として大国言語が横行している現状では，最も必要なのは，エスペラントのような中立的交流手段であり，言語差別は撤廃されねばならない」と強調しておいた。

ポーランドのエスペラント界の重鎮イェージー・ウシュピエンスキー氏に会ったのも収穫だった。同氏は，マスコミ関係の仕事に従事しているが，エスペラント教育法の理論家で，自説を詳細に展開した。要するに，不規則性のないエスペラントの特色を活かして，学習者の類推能力を十分に活用すれば，教育効果は一段と高まるとのことだった。

協会本部のそばのビルの一室で，婦人ばかりのエスペランチストの会合にも顔を出した。別段のプログラムもなく，一同ただ雑談するだけだったが，エスペラントのように，ふだん使う場面が比較的少ない言語の場合は，このような

集まりも必要だと思った。

さて，ポーランドでは首都以外に，西南部の片田舎を訪れる機会があった。ドイツ国境に近いフスホーバという村に長年の文通相手チェスワウ・ストゥィコフスキー氏が住んでいる。同氏は，40そこそここの年代，小さいときにポリオを患って，動作がやや不自由だ。チェコのヨセフと同じく，チェスワウも一介の労働者だが，エスペラントは独習ながらたいへん上手だ。田舎では相手がいないので，ひとり鏡の前に立ち，大声で会話の練習をしたという。しかし，ヨセフと違って，チェスワウは対人関係に積極的だ。自分の村にエスペラント・グループを創設し，大勢の同好者を育成したとのことだ。

日本から客が来たというので，土地のエスペランチストが続々と集まって来た。みんなでボロ車に乗って，周辺をドライブした。

このあたりは広々とした農村地帯だが，どういうわけか，エスペラントが盛んだ。まず，フスホーバは，人口１万２千にエスペランチスト30人余り，近くのレシュノの町は，６万の住民にエスペランチスト100人，ラービッチは，３，４万の人口に対して200人以上のエスペランチストがいるということだった。例の比率計算によると，１万人当たり17人から25人以上ものエスペランチストがいることになる。異常に多いので，少し半信半疑になった。しかし，やって来た顔ぶれを見ると，みんな結構達者に話し，その上20代から30代の若者が多い。少々割引して考えても，この地方ではたしかにエスペラントが隆盛しているという印象だった。

付近の名所を一巡したが，その間にも気心知れた仲間同志の話が大いにはずんだ。現政権に対する遠慮のない意見も出た。社会主義圏ではあまりないことだ。目下禁圧されている自主労組「連帯」のことも話題となったが，連中の一人などは，「『連帯』は，俺達のここにいつも生きているぞ」と叫んで，ドンと胸を叩いてみせた。ポーランドの前途は，まだまだ多難のようだ。

いろいろと見たなかで，いちばん記憶に残ったのは，ゴスチンの大修道院だ。アルプス以北では最大とのことで，丘の上に立ち並ぶ堂塔伽藍もさること

ながら，そこにたまたま居合わせた80人ほどの信徒の一団には驚いた。修行と観光を兼ねての寺院巡りは，日本でもよく見かけることだが，このゴスチンの一行は，何とエスペラントを常用語としているのだ。エスペラントに巧みな修道僧が何人もいて，聖書の朗読も，賛美歌も，説教も，食前の祈りも，すべてエスペラントでとりおこなうのだ。この分では，恐らく「告解」(いわゆる懺悔）さえも，エスペラントでやるのではなかろうか。遠来の客ということで，私のために一同が歓迎の歌を歌い，僧侶がエスペラントで旅の平安を祈ってくれた。ここまでくれば，人口語のエスペラントも自然言語と全く同等だ。ただただ恐れいるばかりだった。

(6) **ユーゴスラビア**　ユーゴスラビアは，ソ連圏ではないが「東欧」に入れてよいと思う。社会体制も，民族，言語も「西」とは異なっているからだ。同国には，イタリアから入国し，クロアチア共和国の首都ザグレブに4日間滞在した。7年来の文通友達相手ヨゼフォ・マレービッチ氏の自宅に世話になった。

前節Ⅲの資料でわかるように，この国は，世界エスペラント協会の会員数から見れば，東欧随一である。社会主義圏の中では，いちばん開放的で，旅行者への規制はほとんどなかった。

ユーゴスラビアは，6つの共和国から成り，民族，言語，宗教なども多彩だ。エスペラント組織も，したがって，一枚岩の「協会」ではなく，「ユーゴ・エスペラント連盟」という連合体だ。世界エスペラント協会の元会長イボ・ラペンナ氏は，この国の出身で，「エスペラント修辞学」をはじめ数々の著作がある。

私が訪ねたときは，ちょうど時期が悪く，組織の責任者に会って事情を訊ねる機会もなく，エスペランチストの会合にも出席できなかったが，わが友マレービッチ氏の案内でクロアチア・エスペラント協会を訪問した。都心の一角を占める大きなビルの中の事務所では，たくさんのスタッフが働いていた。若い

編集員が，新しく刊行される雑誌の見本刷を見せてくれた。「OVO」(「たまご」) というタイトルで，アート紙のような上質紙を使った大判の雑誌で，イラストや写真が多く，いわばエスペラント版の「パンチ」誌とでもいえるものだった。ここでも，エスペラントは公的機関の援助を得ているようだった。そういえば，毎年ザグレブで開催される「国際エスペラント人形劇祭」も有名だ。日本からも参加劇団があり，好評を博したとのことだ。

わが友マレービッチ氏は，40才代，専門はコンピューター技師だが，今は学校関係の図書出版社に勤務している。エスペラントは，もちろん堪能で，サイバネチックスのエスペランチスト専門家集団に所属し，外国で研究発表をしたこともあり，教科書の執筆にも関係しているとのことだ。たまたま寒波の襲来があり，私がややひどい風邪にかかっていたこともあって，ザグレブではたいてい同氏宅の居間でゴロゴロして過ごした。その間にも，勤務先の所長に会ったり，マレービッチ氏の同僚達の大勢いるパーティに出席したりして，エスペラントの宣伝に一役買った。

ユゴースラビアのエスペラント事情については，あまり得るところがなかったが，ここでも，エスペラントを通じて友好の人の輪は，一段と広がったのだった。

(7) **その他の国々**　東欧諸国で私が訪問しなかったのは，アルバニアと東独(ドイツ民主共和国) である。

前者については，世界エスペラント協会の年鑑にも記載がなく，エスペラントの未開拓地と思われる。アルバニアは，一般の旅行者を受け入れない，徹底した鎖国政策をとっているので，事情はよくわからない。

東独に関しては，年鑑によると，エスペラントの国内組織がある。ベルリンに本部をおく「ドイツ民主共和国文化連盟」の中に「エスペラント協会」があり，世界エスペラント協会に加盟している。前節Ⅲの資料を見ると，個人会員数などは，その他の東欧諸国に比べてはるかに少なく，西独とは比較にならな

い数である。しかし，ドイツからは伝統的にすぐれたエスペランチストが輩出していることを考えると，東独のエスペラント運動の現状は，一般人の国際交流について政府の非開放的な政策が大きな要因となっているようだ。(とは言っても，現に，東独には，私の7年来の文通友達クルト・パーデル氏もいる。49才，フランクフルト・アム・オーデル市に住み，企業の技師をしていて，時折音信がある。)

ソ連・東欧各国の「開放度」を，エスペラント事情がはからずも反映しているようなのは，興味あることだ。

V. おわりに

東欧から西欧へと1年近く駆けまわって，ヨーロッパは多民族，多言語社会だと，あらためて痛感した。米国とほぼ同じくらいの広さの地域に，31の独立国と50余りの民族語が存在する。まさに言語の坩堝だ。この多様性は，多彩で豊富な文化を産み出してきたのと同時に，他方では，長年にわたって諸民族間の紛争，確執の原因となってきた。

現在のヨーロッパの直面する最大の問題のひとつは，このような言語的混乱だと思う。

西欧では，ヨーロッパ共同体が拡大発展して，政治的，経済的に協調の気運が高まっている。しかし，ヨーロッパ共同体では，建前としてすべての加盟国の言語を公用語として認めているものの，実際には，英語やフランス語を「作業言語」にしているということだ。少数民族語を使う人々にとっては，これは一種の差別であり，無用な負担を強いるものであろう。

東欧圏の事情は，あまりわからないが，ロシア語がどこの国でも学校教育で必修科目とされていることもあり，事実上圏内の共通語となっているのではないだろうか。

しかしながら，現存の民族語は，どれひとつをとっても，他民族の民族感情とは相容れない「歴史の垢」に染まり，構造も不規則で，習熟するのは容易なことではない。真の意味での「国際共通語」となる資格はないと言わざるを得ない。その代案としては，国籍的に中立で，構造も論理的，合理的であり，且つ学習にも容易な人工語（計画言語）しかない。私の考えでは，この三要件を具備し，しかも現実に国際交流の手段としてりっぱに機能しているのは，エスペラントなのだ。

エスペラントを話しているときに，人は国境を意識しない。民族や国家の枠を越えた「人類共同体」の一員という実感に我を忘れるのだ。国家・政府間の「国際外交」とは別に，各国一般市民の間の直接交流を「民際外交」と呼ぶとすれば，エスペラントは，まさに「民際語」として，絶大な力を発揮するのだ。

米ソ首脳会談が実現し，東西の対立は緩和の方向に動き出している。諸国民の相互理解と友好の進展は，この動きに見えざる貢献をするものだ。

東欧でも，西欧でも，私が会った人々すべての共通の念願は，平和と生活の向上だった。「人間性」は，いたるところで共通であった。私の長い旅行の最大の収穫は，平凡な表現ながら，「人間家族の発見」ということに尽きると思う。

（1985年12月9日　稿了）

〔付　　録〕

東欧のエスペラント事情

——講演資料——

1985年12月15日　東京・埼玉合同ザメンホフ祭
中野勤労福祉会館

Ⅰ．**概観**　東欧のエスペラント運動は，隆盛している。その理由や特色として次の点を上げることができる。

1）「体制内運動」である，2）公的支持がある，3）人口に比べてエスペランチストの数が多い，4）組織が完備している，5）財政がほぼ安定している，6）出版活動が盛んである，7）一般市民対象のＰＲ活動が活発である，8）運動の伝統が長い，9）固有の言語的事情がある（ⅰ．いずれも小数民族語，ⅱ．歴史的に大国（言語）支配への反発，ⅲ．中立普遍的国際語への志向），10）政治的事情がある（ソ連・ロシア語支配への反動）

東欧エスペラント運動は，東西緊張緩和の大勢に沿って，今後予想される政治・社会状勢の安定，経済事情の好転，国内では自由化政策，対外的には開放政策の推進により，将来一層発展する可能性がある。

Ⅱ．資料　東欧エスペラント運動の現状

国　　名	人　　口	個人会員（人口100万当）	エスペランチスト（人口１万当）
ユーゴスラビア	2,280　0.5%	81　3.5%（4人）	
ハンガリー	1,069　0.2%	76　3.3%（7人）	7,000（6.5人）
チェコスロバキア	1,542　0.3%	59　2.5%（4人）	5,300（3.4人）
ブルガリア	894　0.2%	46　2.1%（5人）	7,000（7.8人）
ポーランド	3,657　0.8%	41　1.8%（1人）	7,000（1.9人）
東ドイツ	1,670　0.4%	9　0.4%（0.5人）	
ルーマニア	2,255　0.5%	8　0.4%（0.4人）	3,000（1.3人）
合　　計	13,367　2.9%	320　14.3%（2.4人）	29,300（3.1人）（ユーゴ、東独を除く）

〔注〕

1. 人口は，「朝日各国情報　ザ・ワールド'86」による。単位，万。
2. 「個人会員」とは，世界エスペラント協会加入者のことで，同協会「年鑑」(1985年版) による。
3. 人口，個人会員数とも，パーセンテージは，世界全体に対するものである。
4. 「エスペランチスト」数は，現地の責任者から取材した概数である。